

子育てサロンにおけるスタッフの心理傾向と考察 —大阪府岸和田市の取り組みと質的調査から—

Psychological Tendency and Consideration of Staff in Child-rearing Salon
— From the approach and qualitative investigation of Kishiwada City, Osaka Prefecture —

梅 野 和 人
Kazuhito UMENO

要旨

本研究は、子育て支援事業のひとつである子育てサロンのスタッフに対して質的調査を行い、その心理傾向を明らかにして、支援方法について考察することを目的とする。対象者は、大阪府岸和田市の各地域で継続的に支援に従事している人、合計17名である。詳細な半構造化面接を行い、合計255分に及ぶインタビューデータを得た。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を参考に用いて分析した結果、7のカテゴリと26の概念が生成され、関連性を図化した。子育てサロンスタッフの心理傾向は、次のようなプロセスによって構成されることが示された。支援者（スタッフ）は、まず自らの子育て体験や子どもと関わった経験から、「親（母親）としての義務・責任」や「親・子育ての気持ちの安定」等を基本に、自分の「子どもへの愛着」を形成し、同時に「家族の存在・協力」、「周囲への気づき」を得て、体験者の知見から利用者と関わり支援を行っている。一方で、「現状との比較や認識のずれ」によって支援方法や利用者との接し方に戸惑いを感じていることが示された。

キーワード：子育てサロン、修正版グラウンデッド・セオリー法、母性傾向

問題と目的

子育てにおいて、支援を必要とする状況が広がっている。乳幼児が育つ過程で人と関わる環境は、歴史・社会的に大きく変貌してきており、それにとまって親や身近な大人たちの生活スタイルも子育て観・子ども観も変貌し、乳幼児の姿・特性に変化が現れている¹⁾。パーソナリティ、態度、能力などにわたって見いだされてきた性差、心理学的性差の多くは、性別分業を前提とする社会の中で男性と女性が異なる教育や役割を持ってきたことの結果とみなしうる。それは、少なくとも、ある社会的状況の中では一種の最適化として機能してきたことは確かである。しかし、家庭・子育てをめぐる価値観および現実の変化は、従来の両極に分化した心理学的性差を少しずつ解消させていく可能性を予想させる²⁾。近年、待機児童問題が深刻化し、「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」（1995-1999）から少子化対策推進関係閣僚会議で決定された基本方針により具体的実施計画を定めた新エンゼルプラン（2000-2004）が推進されていた時期、山縣³⁾は、子ども家庭福祉サービスにおける5つの具体的課題として、在宅子育て層への支援、子育ての仲間作り、地域福祉の資源としての組織化と育成・支援、総合的な供給体制の確保、システムの柔軟性の担保を挙げ、子育て支援

の本格的な事業の必要性を強調した。

その後、“子育て支援”という言葉が一般的に周知され、社会が子どもを持つ家族を取り巻く環境が整い始めている。それとともに法律も整備され子育ての現状に沿ったものになりつつある。2012（平成24）年8月に施行された「子ども・子育て支援法」（平成二十四年八月二十二日法律第六十五号）第一章総則では、その目的として第一条に「この法律は、我が国における急速な少子化の進行並びに家庭及び地域を取り巻く環境の変化に鑑み、児童福祉法（昭和二十二年法律第百六十四号）その他の子どもに関する法律による施策と相まって、子ども・子育て支援給付その他の子ども及び子どもを養育している者に必要な支援を行い、もって一人一人の子どもが健やかに成長することができる社会の実現に寄与することを目的とする。」と記している。

持続可能な社会形成のために、大豆生田⁴⁾は、「子育て支援型社会」の構築が必要であるとし、目先の労働政策だけではない子育て支援型社会における保育の役割を再構築するため、子育て支援型社会のグランドデザインの構築、「保育」と「子育て支援の統合的視点、子育てコミュニティの形成などを課題としている。

一方、子育て支援を利用する家族について、柏木⁵⁾は、母性は幻想であるとして母親と子どもは一心同体、ゆえに以心伝心というこの理解は妥当ではない。以心伝心のコミュニケーションはなにも母親だけの特徴ではないとし、篠原⁶⁾は、乳児刺激に対する反応は刺激により一義的に規定されるものではなく、そこに無視しがたい母親間の差異が存在することを示唆し、母性が確固たるものではないとした。また、利用者の心理・行動の特徴として若本⁷⁾は、利用者は育児ストレスがあるから子育て支援を利用しているわけではないという結果から、経済的に困難がなく、就業していない専業主婦で、夫との関係に満足している女性、すなわち相対的に恵まれた社会的状況にある女性であること、さらに子育てに関する不安からよりも、開かれた場での子育てや自分自身のリフレッシュを求めて、子育て支援を利用していることを見出している。幼稚園などの子育て支援を利用する保護者について、田中・戸田・横川⁸⁾は、親同士の仲間作りの機会としてだけでなく、在園児との活動を通してわが子の発達を見通す機会になることや在園児や他の未就園児の姿を通して、幼児期の発達を理解する機会になったりすると述べている。このことから、保護者は子育て支援の場においてさまざまな発達段階の子どもと直接かかわることができる機会を求めていることが分かる。一方、他児への関心が低かったり、わが子との関わりにいらだちや不満を抱く保護者の姿も明らかになり、支援の場のあり方や援助の方法について課題としている。また、「ママ友」関係の特徴として、實川・砂上⁹⁾は、専業主婦にとってママ友付き合いは、子育ての共感や情報交換を得られるなど、サポート的な人間関係であるが、この付き合いにおいては親役割が優先されるため、「親役割を担う自分」と「個としての自分」との葛藤が生じやすいなど、母親は個としての友人関係を形成しにくいとして、子育て支援の場では母親が個としての友人関係を形成するための支援も検討する必要があるとしている。

現在、少子化対策として取り組まれている子育て支援事業はさまざまな資源を活用して行われている。子育て支援事業は主に保育所や幼稚園など、これまで地域に根ざして子どもに直接

かかわる専門機関が中心となって進められている。さらに地域子育て支援拠点事業を行う支援センター等と連携しながら子育て家庭のきめ細かいニーズに応えている。そのなかで、地域における子育て支援のひとつが子育てサロンである。子育てサロンは社会福祉協議会が中心になって市町村地域の各小中学校区に設けられていることが多く、地域の人的資源が積極的に活用されている。子育てサロンの類型として、工藤¹⁰⁾は、センター型、児童館型、地域主体型、常設ひろば型に分類し、サポートの機能は母親のケア行為（育児遂行）を直接的に肩代わりする「直接サポート」、母親がケア行為をおこなえるようにサポートする「間接サポート」、関係的支援あるいは制度的支援の一方が、もう一方の機能を促進する形で、両支援が複合的に母親のケア行為を支える「複合サポート」の3つの機能から構成されているとしている。この支援事業の特徴のひとつは住民が支援の中心となって子育て家庭が直面する様々なニーズの受け皿となっている点である。子育てサロンのスタッフは民生委員や主任児童委員をはじめ、ボランティアなど子育て家庭と同じ地域に住む人々であり、相互に関心を持つきっかけになっている。子育てする親は子どもを育てる中で些細な悩み事や心配事等を親近者や近所の人たちに相談し解決することが多い¹¹⁾。杉村・鈴木¹²⁾は、母親が情報収集する媒体として親や友人など身近な人に相談することが多いこと、一方で行政が提供する情報は十分に行き届いていない現状について述べている。

子育て支援は保育所や子育て支援センターの保育士が中心的な役割を担っている。しかし、子育て支援における保育士の相談支援の実践は、保育者が心を砕いて取り組んでいても「業務」としての位置づけや評価が不十分であり、保育者自身も子どもの保育のために行われている付加的業務として認識されてきた¹³⁾。香崎¹⁴⁾は、子育て支援における保育士の力量の質の向上が叫ばれている昨今にあって、同様の仕事を担う支援にはどのような力量が求められるのか、厚生労働省が規定している子育て支援員研修実施要項¹⁵⁾に基づいて研修科目シラバス概要をおさえたうえで、さらに支援員研修受講者が捉える支援員の役割を参考に求められる力量を考察・検証している。また子育て支援員の研修について、藤林¹⁶⁾は、保育や福祉の人材確保のために研修内容に多様性を持たせ、高齢者分野や障害者分野との研修内容の共通化を考えているが、研修時間が短く不十分であることを指摘している。さらに研修では基礎を学び、現場で実践を積んで深めることを提言している。今後、子育てサロンが地域に認知され、子育て家庭に対する役割と支援の重要性が増すことになる。子育てサロンに従事する人たちが地域の子育て支援の人的資源として自らを位置付け、子育て家庭の現状の理解と基本的な相談支援の方法等について支援者の視点を取り入れることが求められるが、現状は十分とは言えない。

本研究では、筆者が以前より調査対象にしている大阪府岸和田市の子育てサロンのスタッフが支援者として地域で子育てしている家族への理解を深め、支援意識を向上させることを目的に、子育てサロンのスタッフを対象に行った量的調査（2012年8月実施）で得られた結果を基礎データにしてインタビュー調査を実施した¹⁷⁾。今回の質的調査の結果をもとに、地域で子育て支援に携わる支援者の役割の明確化を図り、意識化への具体的な方法について検討していきたい。

方法

2012年11月から2013年1月にかけてインタビュー調査を行った。対象者は、事前に社会福祉協議会の子育て支援担当職員に調査の主旨や実施方法を説明して協力を求め、了解を得られた地区のスタッフである。インタビューは4か所の地区において各々のグループで日時を設定し、計17名（女性15名・男性2名、平均年齢58.7歳、子育て経験有15名、無2名）に対して実施した。調査に先立って、質問項目に対する年代による差異がある可能性が予想されたことと、インタビューを行う際に話しやすい環境を設定するために、倫理的配慮としてグループ構成の段階でサロンの運営の中心的な役割を果たし、且つ年齢的に近いグループを選定した。内容は事前にメンバーに本研究の目的をあらためて説明し、会話をすべて音声記録すること、調査後に逐語録を作成すること、個人情報に配慮して個人名および記述内容について配慮することの同意を得た。調査後、内容のカテゴリ分類および検討に関して、各グループのインタビューに同席した社会福祉協議会職員の継続的協力を得て、データ分析および結果の個人情報が表出しないように主旨が変わらない範囲で一部加工を行った。なお、同席した社会福祉協議会職員はインタビューの内容に影響を与えるような発言は行わなかった。

半構造化面接法によるインタビューに先立ち、対象者の属性とするため量的調査用紙を用いて「子ども」や「子育て」のイメージ、さらに「母性愛」信奉傾向尺度¹⁸⁾による13項目について質問した。質問に記述した内容について、良い悪い、好ましい好ましくない、という判断は一切しないように伝え、「まったくそう思わない」から「まったくそう思う」までの5件法で評定した。その後、インタビュー項目は「母性愛」信奉傾向尺度の量的調査結果にもとづき、江上の提案した設問¹⁹⁾を参考に以下の項目を設定した。

設問1. あなた自身が、子育てにおいて「こうするべきだ」と思われていることはありますか。

設問2. 母親として「こうあるべきだ」と思われていることはありますか。

設問3. 今の子育てや母親についてどう思われますか。

対象者の属性

グループ	面接実施日	氏名	性別	年齢	子育て経験	「母性愛」信奉傾向平均値
A	2012.11.13.	a	女	40	有り	2.54
A	2012.11.13.	b	女	48	有り	3.23
A	2012.11.13.	c	女	37	有り	3.08
A	2012.11.13.	d	女	47	有り	2.54
B	2012.12.19.	e	女	53	有り	3.23
B	2012.12.19.	f	女	52	有り	3.15
B	2012.12.19.	g	女	57	有り	3.62
B	2012.12.19.	h	女	64	有り	2.54
C	2012.12.21.	i	女	62	有り	3.77
C	2012.12.21.	j	女	60	無し	1.77
C	2012.12.21.	k	女	63	無し	4.15

C	2012.12.21.	l	男	65	有り	3.15
D	2013.1.23.	m	男	67	有り	4.23
D	2013.1.23.	n	女	69	有り	3.62
D	2013.1.23.	o	女	72	有り	3.92
D	2013.1.23.	p	女	72	有り	4.38
D	2013.1.23.	q	女	69	有り	4.23

設問1では、子育てや子どもに関わった経験によって具体的な行動や方法について、設題2では親としての意識や理想について、それぞれ独自の価値観が語りに表出するのではないかと考えた。さらに設題3では母性愛意識と共に世代間の子育てについて語ることで、子育て支援を提供する立場の子育てや世代ギャップのある母親への意識について明らかにできると考えた。インタビューで設定した設問が、行動や方法を問うたものであっても意図した内容から意識や認識について言及されたり、逆に意識についての質問から行動や一般的な子育ての考えに移行することがあったり、多少設問から離れることがあったが、活発な意見を引き出すことを優先して設問への修正を促す発言は最小限にとどめた。インタビュー時間は、グループA：50分、グループB：79分、グループC：65分、グループD：61分であった。

分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー法（M-GTA）を用いた。M-GTAは、木下²⁰⁾によって方法論が確立されている。木下によれば、この分析方法の適性は日常生活上の問題を抱えている人びとの複雑な困難経験を可能な限り深く理解しようとする、あるいは、もう一歩進めてそうした経験を再構成し、理論的モデルの生成を試みようとする場合であり、援助が行為として提供され、受ける側も行為で反応する直接的なやり取り（社会的相互作用）のレベルの場合であるとしている²¹⁾。さらに、その結果が解決や改善に向けて実践的に活用されることが期待されている場合である。これらのことから、本研究では以下の理由によってこの方法を用いることにした。(a) 質的研究として、分析手法が明確であること。(b) 対人援助における相互作用の分析対象が適していること。(c) 分析結果を実践に還元できることを重要と考える方法の主旨が、研究の目的と合致している。

分析の手順

分析を行う際に、分析テーマに合うものを意識しながら観察事例を読み込み、関連があると思われた箇所を抜き出して分析ワークシートを設定、作成していった。分析テーマは「母性愛」信奉傾向尺度の質問項目を参考に、量的調査で抽出されたキーワードの「母性像」「母性行動」「母性認識」にもとづいて設定した。分析を進めるにつれて、「母性像」と「母性認識」の設定は、母性意識が理想の子育て像に由来するものと考え、最終的に「母性像・母性意識」と、あらためて設定し直した。分析ワークシートはテーマの定義とヴァリエーション（具体例）を参考にして概念を生成した。データの分析を進める中で、具体例をさがしてワークシートに追加記入すると同時に、他の具体例に該当する新たな概念を前後の関連から作成した。また類似性だけに注目することなく、対極に位置するヴァリエーションの存在について、できる限り比較

の観点を失わずワークシートの作成、確認を進めた。概念名は、データの具体例を追加する際に解釈の参考となる疑問点などを理論的メモに記入し、参照して適宜修正を行った。分析データの作成後、理論メモや具体例の言葉を参考に概念の関係性について考えた。さらに複数の概念をカテゴリとして集約し、カテゴリ相互の関係について結果図をまとめ、ストーリーラインとして説明するため簡潔に文章化した。これらの分析過程における解釈の恣意性を防ぐために、以上の過程においてインタビューに立ち会った社会福祉協議会の職員4名と共に、分析ワークシートの作成、ヴァリエーションの抽出、概念の類似性と対極性の検討、カテゴリ集約の判断を行った。

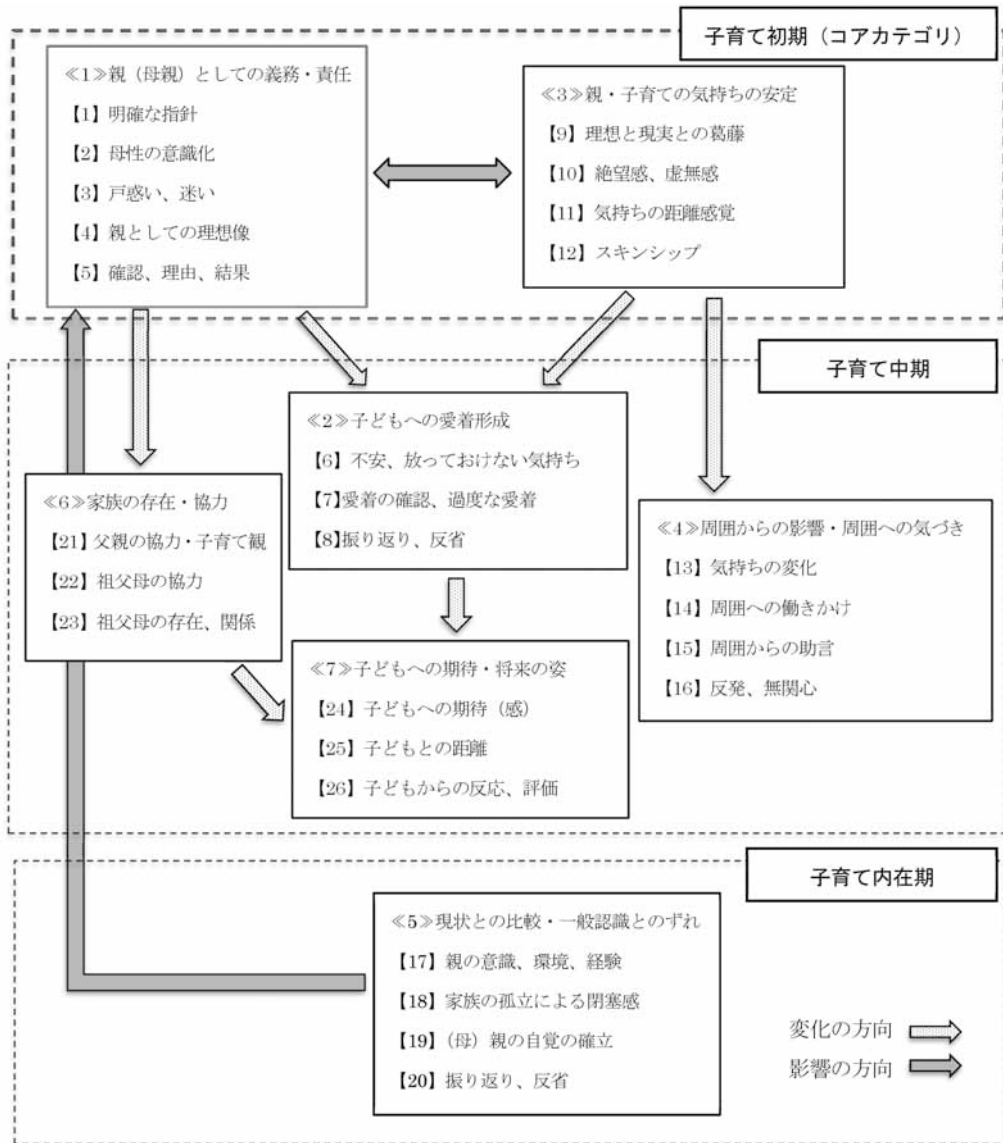
分析ワークシートの例

概念名	戸惑い、迷い
定義	親としての義務と責任について一貫性を認識しつつ、子育ての対応に日々戸惑い、迷う
ヴァリエーション (具体例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ お小遣いのこととか話していて、ある程度自分の中にあるかな。お兄ちゃんは小学校に入ってからと思って、小学校に入ってから買ったのかな。そうやのに下の子は2歳から（ゲーム）やってる。それは良いのかって言う、自分自身の甘さもあるし。（中略）良いとは思わないけど、目つむっとけて言う訳にもいかんし。 ・ 子どもとなるべく一緒にいてあげる。学校から帰ってお母さんがいなかったら、子どもも「ただいま」と言ってなかったら寂しいだろうし、（中略）まあ仕事してる人は仕方ないけど、なるべくおってやった方がいいかなって思います。 ・ 主人のお母さんがすぐ近くやから預ければいいのに、何か意地になってるところがあって、自分ひとりで育てあげてみたいところがあって、（中略）ちょっとどうしようもないからって思ったときに、すごくフツと軽くなって。 ・ 子どものペースに合わせてあげるって言うのが母親なんやろうなあって思うんですけど、ちょっと私には無理かなと。（以下省略）
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 親が一貫性を持って子育てをしたいと考えて関わる。 ・ 日々の生活のなかで子どもと関わる場合、状況や経験の蓄積によって対応が異なる。 ・ 一貫性を持たないことによって子育ての変化はあるか？→子育てに対する寛容さや子どもへの信頼、見守り。 ・ 子育ての方法を自分の理想とするイメージから考える。（以下省略）

概念生成過程と分析の段階

研究テーマとして挙げた設問から、概念【戸惑い・迷い】を例にしてワークシートの生成過程について簡単に説明する。インタビューデータの中で分析テーマに関連する箇所、「お小遣いのこととか話していて、ある程度自分の中にあるかな。お兄ちゃんは小学校に入ってからと思って、小学校に入ってから買ったのかな。そうやのに下の子は2歳から（ゲーム）やってる。それは良いのかって言う、自分自身の甘さもあるし、上の子が「1年生からちゃうの」って。「下の子ええの」って。上の子がやってたからね、やってしまうんやけどね。良いとは思わないけど、目つむっとけて言う訳にもいかんし。」という部分に着目し、この部分についての意味を検討した結果、この具体例を、子育て経験の蓄積や考え方の変化によって“こうあるべき”という考えに戸惑ったり迷ったりする行為と解釈した。この解釈にもとづいて、「親としての義務と責任について一貫性を認識しつつ、子育ての対応に日々戸惑い、迷う」と定義した。これに類似する例として、「子どもとなるべく一緒にいてあげる。学校から帰ってお母さんがいなかったら、子どもも「ただいま」と言ってなかったら寂しいだろうし、（中略）まあ仕事してる人

設問に関する言動のカテゴリと概念関連図



は仕方ないけど、なるべくおってやった方が良くかなって思います。」という例があり、概念のヴァリエーションとして追加した。これらの具体例から、理論メモには「親が一貫性を持って子育てをしたいと考えて関わる。」「日々の生活のなかで子どもと関わる場合、状況や経験の蓄積によって対応が異なる。」「子育ての方法を自分のイメージから考える。」を記した。また解釈とは反対の観点から、「一貫性を持たないことによって子育ての変化はあるか? →子育てに対する寛容さや子どもへの信頼、見守り」を追記した。このように具体例を追記していき、「戸惑い・迷い」の概念として生成した。

次に、《親（母親）としての義務・責任》のカテゴリを例に、分類過程について説明する。グループ A のインタビューで得られた事例からワークシートの作成を進めるなかで、概念「戸惑い・迷い」の他に、「明確な指針」、「母性の意識化」、「親としての理想像」、「確認、理由、結果」の概念を生成し、親の義務や責任を果たそうとしているカテゴリとしてまとめた。さらにこれらの概念の関連を検討していくと、5つの概念が母性像・母性意識に起因する義務・責任について示されていることが推測された。

また、《親（母親）としての義務・責任》と名付けたカテゴリが、子育て初期において《親・子育ての気持ちの安定》と相対に関連していることが示された。このカテゴリは、子育て中期では《子どもへの愛着形成》や《家族の存在・協力》、さらに事例の検討を進めた結果、子育て内在期の《現状との比較・一般認識のずれ》に影響を及ぼしていることが示唆された。分析の段階は以下の手順で行った。最初に A グループのインタビューで得られた具体例から分析を始めて、概念の生成を進めていった。その後、B グループのインタビューを行って同様に概念を生成した。その際、A グループで生成された概念を確認すると共に、B グループのインタビューを実施した後、新たな概念の生成、確認を並行して行った。概念の生成過程で、類似した具体例が見つかった場合は分析ワークシートに追記し、見つからない場合は留めおいて、後々新しい概念の可能性が見られた場合に再び以前の事例を確認し検討する作業を繰り返した。例えば、A グループはメンバーの年齢が 37～48 歳で他のグループのメンバーと比較して若く、子どもの年齢も幼児から中高生のまさに子育て期の親であるため、関連図の子育て初期から子育て中期にかけての具体例が豊富であった。次に B グループのインタビューでは、メンバーの年齢が 52～64 歳で、子どもの年齢範囲が A グループと比較して高く、子育て中期から子育て内在期にかけての具体例が多かった。そのため概念の生成において発言が同様でも意味や内容が異なる場合は違うものとして分類した。

本研究の分析過程と結果について以下の作業を行って、結果の妥当性と信頼性の確保に努めた。まず分析開始時に各インタビューに同席した社会福祉協議会子育て支援担当職員と共に、分析テーマの設定および具体例の選出と概念の生成を行った。さらにインタビュー終了後に概念間の関連とカテゴリの生成について立会った全職員の協力を得て検討、確認作業を 3 回、合計約 11 時間行った。

結果

以上のプロセスを経て、最終的に 26 の概念と 7 つのカテゴリが生成された。上記の分析関連図は、概念名を【 】、カテゴリ名は《 》で関連を示した。インタビューにおいて語られた範囲は子どもの幼児期から成人し、親元から離れるまでであった。したがって親となる時期から子どもの幼児期までを概ね子育て初期とし、子どもとの関わりが始まる親意識や行動のスタートとなる時期でもあるのでコアカテゴリとして他と分類した。以後、時系列に沿って 3 つの時期に分け、子育ての経過を点線枠で示してカテゴリ関連を明確化し、矢印を用いてカテゴリ間における変化と影響を示した。

分析関連図から結果について概観する。母性像・母性意識および母性行動において、子育て

サロンのスタッフは、《親（母親）としての義務・責任》カテゴリを軸に考えを展開している。義務や責任とは、みずからが思い描く理想の母性の姿や意識によって作られる考え方の指標と考える。スタッフはこのような親としての認識を持ちながら、“こうあるべき”もの、“こうすべき”ものを、子育て体験の中で戸惑いながらも積み重ねていくことになる。他方、理想の母親像や意識とは反対に、日々の生活や子どもと向き合う中で、現実には理想とかけ離れた行動に葛藤し、思うようにならない子育てに失望する一面がある。親としての義務や責任は、子育て初期における《親・子育ての気持ちの安定》カテゴリと相互に影響を及ぼしながら、子育て中期に移行し、成長する子どもに愛着を深め見守ろうとする《子どもへの愛着形成》や、《家族の存在・協力》や《周囲からの影響や気づき》によって、家族の絆を確かめる経験の蓄積を経た後、より広い視野で子どもの成長や自らの子育てを考えることが、《子どもへの期待・将来の姿》につながるようになる。やがて子どもの成長が節目を迎え、自分の子育てを振り返る内在期に入って《現状との比較・一般認識とのずれ》を感じ、経験による子育ての考え方について、子育て支援の役割の中で母性像や母性意識を再認識している。サロンのスタッフは、これらの行為を往還的複合的に実践することで、子育て中の家族と関わろうとしていることが分かった。

各カテゴリの分析

次に、カテゴリを構成する概念の関係を中心に、母性に関する枠組みを説明する。

《1. 親（母親）としての義務・責任》カテゴリの分析

サロンのスタッフが親になったり仕事として子どもと関わるようになったりした子育て初期の段階、親または保育者は、義務や責任を感じながら、自らが思い描いていた理想の大人として子どもに関わろうとする。日々の生活において、時には対応に戸惑い迷いながら、成長する子どもにとって最善の方法を模索し求める。【明確な指針】は、こんな子どもに成長してほしい、こんな人になってほしいという意識から、子どもに示唆したり関わったりする。「どういう人間に育ってほしいかっていう、人間像は持っていますね。こういう、人の嫌がることはしないとか。そういう人間像はやっぱり持っていて、その方向に行くように、常に話したりしてるかな。」(a)、「こうやっぱりいわゆる社会に解けこめる、社会と対応できる子どもに育てたいなということはあるですね。」(m)、「さっきも言いましたけども、やっぱり子育てって良い事と悪い事のけじめをきっちりつけさせると言うこと。」(p)、「でまあ悪いこと良いことはきちっとって言うのはしっかり言ってあったんでね、もう下も30越えてるんですけどね。」(q)等の語りから、子どもの行動や成長にともなって形成される明確な考え方を概念として生成した。【母性の意識化】は、「親が後から追いかけているみたいなどころがあるんですけど。今も、子育てサロンといった所に関わりながら、こう言う部分が足らなかったなと思うことが多いんです。」(e)、「そうするとやり残したことの方が多いなあって言うことはやっぱり思いますね。」(g)、等の語りから親になってからの気づき、子どもにとって必要なことが子どもの成長と共に理解できるようになることを概念として生成した。【親としての理想像】は、母性の意識化と同時に、親として理想とする具体的行動について語られていると判断した内容を概念とした。

「子育てに関して何事にもあきらめない。(中略)よその子どもと比べたりとか、そういう時期もやっぱりありましたけども、何かこう、また反対に自分の子育ての理想像って言うんですか、そういうふうなのが、理想像と現実が全然違ってきたら、やっぱりすごく自分がしんどくなって大変な時があったんでね。(e)」、「とにかくよく見てってことですかね。よく観察して子どもと一緒に、こうよく見ながら何もかも決めてきたように思うんです。こうせなあかんよって言うんじゃないかって。(f)」、「一緒にいてあげるべきなのは小さい頃ですね。三つ子のそぐらいまでは一緒に、きれいなもの見たらきれいねーとかそういうふうになんと一緒にねえ、いろんなことを体感してあげたら一番いいなと思うんですけど。(g)」、「親の愛情って言うのは何にもかけがえが無いって言うのかな、だから言葉よりも子どもの態度を見てて分かりますよね、で親が嫌な思いをしてやった時には子どもは行かない。(j)」等、子育て経験の積み重ねによって親としての行動が明確になるとしている。ここでは母性という抽象的な概念よりも日々の体験から親のあるべき行動について語られていた。【確認、理由、結果】では、親の義務や責任を感じて実際に子育てをしてきた結果、どのようなことが確かめられたか、またその理由について語られたことを概念とした。「自分自身がいろんなことをため込むとあかんのかなって、最近になってようやく思うようになった。こうしろあしろって言うてもね。楽しいところを見せた方が、気持ちも体も健康に育ってくれるのかなって。(d)」、「とりあえず家を居心地の良い家にしてます、今は。居心地良かったら出て行きませんので。居心地悪かったらすぐ友だちのところに。(e)」、「子育てっていうより何もかも子どもと一緒に、自分も子どもと一緒に育っていくっていうのを思ってるんで。いつも子どもと一緒に、何するの子どもと一緒に何かしていこうかなって。(g)」、「今やから待ってこ泳がしとこ自分の心を鬼にして待ってことかと思うけど、この子育ての真っ最中のお母さん達に、待っていたら大丈夫やよって言うてもちょっと、ねえ、大変やろなって思うんですけど。(g)」等で注目したのは、どの時期においても自らの子育てを何度も確認し、結果について考察する親の姿である。子育て初期の母親に話しかけながら、自らの子育てや子どもとの付き合い方について振り返っていることが表情や語りの中で示されていた。このカテゴリでは、比較的自らの考えや経験に基づいて語られることが多く、うなずきや自分に言い聞かせるような口調など、強い感情の表出がみられた。

【1】明確な指針（他 11 事例）

〈具体例〉「私が見捨てたらこの子は誰が拾ってくれるんかっていう気持ちが常にあったんでね。だからそれはつねに子どもにも言いました。「あんたにはお母さんしかおれへんやから」って言うことでね。だからなんぼ偉そうに言うても、あんたのこと思ってるんはお母さんだけ、お母さんお父さんだけやでっていう形でね。ずっと伝えました。」(e)

【2】母性の意識化（他 9 事例）

〈具体例〉「だからいずれにしても母親って言うのは何があっても一家の、いま太陽って言われたけど一家の中でいつも何があっても大きな心で受け止められて、良い方と考えられて家族がやっぱり仲良く暮らして行く方向に行くと中心はやっぱり母親やと思いますのでね、存在って言うのはすごい母親の存在って言うのは大きい訳でしょ。」(p)

【3】戸惑い、迷い（他 8 事例）

〈具体例〉子どもとなるべく一緒にいてあげる。学校から帰ってお母さんがいなくなったら、子どもも「ただいま」と言ってなかったら寂しいだろうし、(中略)まあ仕事してる人は仕方ないけど、なるべくおってやった方がいいかなって思います。(d)

【4】親としての理想像（他5事例）

〈具体例〉私は、三つ子の魂百までと言う言葉があるじゃないですか。だから本当に子どもが大きくなるまで傍にいてあげるのが良いと思ってなんです。そうできない方もいらっしゃると思うんですけどね。私はずっとそう思って子育てして来んですけど。(i)

【5】確認、理由、結果（他7事例）

〈具体例〉今は大きくなって中高生の場合は気持ちの待つ、小さい子育て真っ最中の時は言葉と行動を待つ。だから子どもがしようとしていることを親は分かっているから先先言うんじゃなくて子どもから出てくる言葉を待つ。(f)

《3. 親・子育ての気持ちの安定》カテゴリの分析

親としての義務や責任を感じて子育てする中で、時には言葉にできない感情がわき上がった子どもを愛しいと思えなくなったりすることがある。日々の子育てで経験した葛藤や失望、子どもとの距離のとり方や具体的な方法など、親として子どもと向き合う気持ちを安定させることが必要であることが語られた。【理想と現実との葛藤】は、こうすべきと考える母性や親の行動の側面として語られた。「一人目はもう、自分の感情じゃない何かが、グワーツとくる感じがすごいあったので、何か、イライラというか、泣かれるだけで、フワーツとなってしまう感じ。(d)」、「中学生ぐらいになって反抗期が出てきた時に、子どもって今から思えば当たり前のことなんだけど、自分の思う通りにならないんだってことに気が付いたって。(h)」、「私はそういう風にやっていたんですけど。でもベタベタに我がままに、どうかな、でも聞いてしまっかな、子どもかわいいから。でもいけないことはいけないってやってきたつもり。(i)」、「私はね、育児って言うのはね、自分育てだと思っんです。子どもを育てながら自分を人間として育てていく。だから昔は親の後ろ姿を見て子どもは育つて言いますよね。そやから子どもが挨拶できなかったら親ができないんですわ。(p)」は、葛藤によってもたらされる親の成長について語られていて、日々子どもと向き合い体験的なエピソードを語る時期の親とは内容が異なる。【絶望感、虚無感】「抱っこしてて、冷静な自分とイライラする自分がいて、これをほんとに離したら落ちるよねっていうのを思ったことがある。なんか紙一重やなって思いながら。(a)」、「それはちょっとしてから気がついたんです。もう言う事聞かへんって下の子のことずっとと思って、それは自分の枠にはめようとしたからやねんなって気がついて。そのときはちょっと遅かったんですけど。(i)」、「恐ろしいですね、子育て一人のね一つの人格を育てていくって言うことはね。親の思うようには育たないですよ。親の理想通りにはいかないということも育ててみてみんな実感してるんじゃないでしょうか。私としてはまあ一概に自分のしてきたことが間違ってたことも合ってたこともあったかなあって。育て直しはできませんのでね。(p)」等では、子育て初期に陥りやすい孤独や社会との疎外感、または子育て内在期に入ってからの子育ての失望や喪失について語られている。【気持ちの距離感覚】では、気持ちの安定を図る方法のひとつとして、子どもとの良好な距離を見つけ、保ちながら関わる事が語られていた。「その時その時のね、子育てのあり方でねその子の性格もありますしね、でやっぱりその時その時の状況って言うんかな、それに対応していける自分って言うんかな、それが必要じゃないかなあと思うんですけどね。(n)」、「ここしか来るとこないからって。逃げ道があるって言う事がね、私同居してたら今の話しにならへんねんけど逃げ道があつてうちの家しか来ると

こないから、まあ間違わんと家まで来てるからそれで良いんやけど、面白いと思ってせんど笑ったんやけどな。(p)」等の語りから、距離感は子どもの成長によって異なっている。乳幼児期は実際に触れ合うことで心身の一体感が感じられる距離感であり、学童期からは年齢が上がるにつれて適切な距離を測ることで子どもの自立や自尊心が育つことを体験的に学んでいることが語りから判断することができた。【スキンシップ】は、「なるべくね、触れ合ったりとか、やっぱり私は思うんですけど。(c)」、「とりあえずお母さんって言うのは抱っこしてあげて手握ってあげて、本当簡単なことで良いと思いますよ。それが一番子どもにとって、うん。(中略)それやったら手握ってあげてる方が私は良いんちゃうかなと思います。ギュッとしてあげるとかね。(e)」、「ちょっとね、顔をねやっぱり見つめるじゃないけど子どもさんの顔見てあげてほしいなって思っても言えなかったんだけど。(h)」等、具体例がさほど多くなかったが、親にとっても気持ちの安定において重要な行為であり、また母親と乳幼児期の子どものコミュニケーションツールとして語られているため、概念として定義した。このカテゴリでは親としての義務や責任を果たすことを自らが求めながら、そのように考え行動できない親の苦悩について自らを振り返り確認しながら語られた。理想と現実の間で葛藤したり思うように子育てできなかったことへの失望や挫折を味わったりする姿、子どもと適切な距離をとることの大切さを体験的に学び、その方法は親子のふれあいこそが重要であるという認識に到達する語りから、親としての気持ちの安定は、自分の子育てを逡巡しながら長い年月を必要とすることが分かる。

【9】理想と現実との葛藤（他8事例）

〈具体例〉その場で考えて対応していかないと、分からないですもんね。答えてないやろし。(中略)やっぱり悪いことしたら怒ってしまって叩いちゃったこともあるし、イーってなるのもごつつい、自分でなんでこんなになるんやろうって思うんやけど、自分の感情を抑えられなくて。(c)

【10】絶望感、虚無感（他4事例）

〈具体例〉「仕事から帰ってきてご飯作って寝かして、また朝送ってっていう生活だったので、なんかこう「自分は何のために生きてるんやろ」って、「この子と向き合う時間ってないなあ」っていうか、すごいイライラするだけやなとか、そういうのがすごい募ってきた。(b)」

【11】気持ちの距離感覚（他5事例）

〈具体例〉子どもが1歳ちょっとの時に、親に預けて仕事を始めたんですけど、初日の気持ちが今も忘れられへんのですけど、子どものペースではなく、自分のペースで一日過ごせる。仕事場に行く緊張感よりも自分のペースで仕事ができるっていう感じがいまだに忘れられなくて。(a)

【12】スキンシップ（他3事例）

〈具体例〉やっぱり求めて来た時にはしっかりね、目をかけて手をかけてあげるって言うのはあるんやけど。何かね私らも抱き癖がつくってね、絶対抱き癖なんてつかなくてね、うん。抱っこ抱っこって言うたときは抱っこしてあげたら今度は動けるようになったらもう安心して、おいでって言うてもいらんって。(j)

《2. 子どもへの愛着形成》カテゴリの分析

親としての義務・責任と親・子育ての気持ちの安定を日々の子育ての中で図りながら、子どもとの愛着関係が深まる時期の語りを、いくつかの概念として定義しカテゴライズした。【不安、放っておけない気持ち】は、愛着形成の結果として、子どもの自立の時期に親としてどの

ように行動するかが語られている。「私が小さい時に「こうしときや」とか「ああしときや」とか、上の子には細かく言ってたから、未だに「これ食べていい?」とか「これしていい?」とか、「いちいちそんなこと聞かなくていいの」って言うようなことをいちいち聞いてくる割にはすごい反抗するって言うか、何かあの子の中でもすごい葛藤してるんやと。思春期の中で揺れ動いてるんやと思うんです。(c)」【愛着の確認、過度な愛着】は、母性行動の質問に対して、各々の時期の子育てを振り返り、語られている。「私は長いこと子どもができなくて、やっとできた子どもだったんで、もう甘やかして育てています。(d)」、「母親って言うのは自分の体の一部、自分のお腹を痛めて生んだ子どもやからすごい愛情って言うのは、父親も愛情はありますよ、ありますけども父親にはかなえへん愛情が母親やと思うんですね。(e)」、「それまでさんざん関わったかっていう思いもあるんです、成功したかどうかもあるけど自分の中では関わり過ぎて言い過ぎてって言うか。(h)」、「何かやっぱお母さんが安心感を持つというのかな、何か不安で不安で仕方ないって言うかな、何かそんな状態になってるお母さんも多いんじゃないかっていうね、それが子どもに伝わるって言うかな、そやから子どもをいつなりなんて言うかな不安定になってしまうって言うのがあるんでね。(j)」愛着関係の形成は、親として子育ての気持ちの安定に関係している。子育ての葛藤や失望が強くなって気持ちの安定が図られない場合、子どもへの愛着をうまく形成できないことが考えられる。それは子育て内在期において自分の子育てを振り返った時、自戒となって表出される。【振り返り、反省】において「子どもが好きとか嫌いとかの問題ではないんやろな。子ども好きやと思ってた。めっちゃ子ども嫌いやって、子どもができて変わったんやけど。(c)」、「まあその中でも子ども小さい時の接し方とゆうたら本当にこう嫌な親父じゃなかったかなと言う風に思うんですけど。(l)」、「私はやっぱり親というのはねかわいいかわいいで育てるべきではないんじゃないかなってことは思います。と言うよりも自分がね忙しかったからそんなに一から十まで子どもべったりの関わりをまあしてこなかって良かった面と悪かった面とありますんで。もう少し関わってあげたら良かったなあって、自分が忙しいあまりに関わってやれなかったって部分もあったかなって。(p)」、「私はまあ平等に育てたつもりなんですけどやっぱり上の二人からはお母さん、下の弟は甘かったって言われるんです。それは育てるときは気付かないでねきたんですけど、やっぱり成人したらね、私にそう指摘、今こうあるのはお母さんがやっぱり甘かったからよって言われるんですけど、自分は一生懸命してたつもりなんですけどそうやね、(q)」に見られるように、仕事や家事の多忙を理由に子どもとの愛着関係を十分作れなかったと考えて悔やむ語りが、特に子育て内在期の人から多く聞かれた。

【6】不安、放っておけない気持ち（他3事例）

〈具体例〉だから必ずもう、悪いことしたらその時はすぐ子どもに言って。またしますよ、せやけどこの前言ったやろって言うてまた言うんです。それはやっぱりあの、諦めらんと子どもに気づけるってことかなって。(e)

【7】愛着の確認、過度の愛着（他4事例）

〈具体例〉でもやっぱり親として子どもを愛おしく思って、あのどんな親でもやっぱり自分の子どもは大事だと思うんですけどその環境というか条件によって本当に愛情が変な形の愛情になってしまってるって今現実にはあるかなと思うんですけどね。(k)

【8】振り返り、反省（他7事例）

〈具体例〉まあ自分はそれをしてこなかったんで、母親として一家の太陽、もう本当に隠し事の無いね、嘘のない素直なそういうふうなあの家族になるような存在として生きて行けたらって私は今それを思うんです。まあ今までそれをしてこなかった反省、それを踏まえてそれを思います。(n)

《6. 家族の存在・協力》カテゴリーの分析

今回のインタビュー調査に先立ち、参加者に「父親は子育てに参加するべきだ」の質問をしたところ、回答者17名中、9名が5段階評価で「5. とても思う」と回答（「4. まあ思う」6名、「3. どちらとも言えない」1名、無記入1名）した。このことから、子育てにおいて家族の存在や協力に関する語りは注目する必要があると思われる。家族とりわけ父親について、【父親の協力・子育て観】を“父親の存在や子育てに求められる父親の協力と子育て観の相違”と定義し概念化した。「うちは旦那の方が甘いですね。はいはいはいって感じで。うちは一人やからそんなかもしれないけど。甘いなあとは思いうんやけど、つついそうになってしまうんですね。(d)」は、子育て初期から中期にかけて、父親が子どもへの愛着を形成する過程の語りである。また、子どもがある程度成長した後の父親の役割として、「よっぽど最悪、謝りに行かなあかんほど悪いことしたとかそういう時は主人に言ったけど、小さいことは言わなかったんですね。でも高校の時は助けを求めました。主人に。もう頼むから早く帰ってきてって。早く帰ってきておってって。居るだけで良いからって。やっぱりお父さんは怖いっていうお父さんやったから。(e)」、「何か困ったこととかそういうのがあれば先に私に言うてくるっていう形で、それか私から、まあお父さんに相談しとくわとか、そっから間に入ってちょっと話あるみたいやよって感じで主人に言って、それから子どもに今日は機嫌よさそうやから言いなさいって感じで間に入ってあげるとかね。だからその主人と子どもとのパイプ役みたいなのところも私はありましたね。(e)」、「夫に言ったら笑い飛ばすんです。男の子はそれくらいするって。私はなんでこんなことバカなこと中学生にもなってるのってことが結構あったんで。父親から見たらまた違うと。(h)」といった子育て中期の語りがある。「母親だけが子育てに関わるんじゃないかってやっぱり父親も、そりゃ仕事で忙しいですけどもね父親もやっぱりあの子どもにね関わっていくことが大事じゃないかなと思うんですね。(n)」は、子育て内在期の語りである。特に子育て中期から内在期にかけての語りは、父親は家事を手伝ったり日々直接子どもと関わったりすることを求めるよりも、必要な時の良き助言者、あるいは強い存在感を示す役割が期待されている。これらの語りの中では、父親の価値と役割とは世代間の認識が大きく変化していることが推測された。また、今は減少傾向が続いているが、この市では3世代以上同居の家庭が多い。父親の存在は核家族では大きいですが、この地域では父親の役割を補完する存在として祖父母が子育てに関わっていた。このカテゴリーでは、「私らは同居してたから、そうやって言えたけども、同居してなかったら分からないでしょ。親も、多分一緒に住んでたら引き留めてると思います。まあ連れて行っても早く帰っといでなとか。(g)」、「母親の逃げ道って言うのは多分、まあ親が近くでおれば、おじいちゃんおばあちゃんが近くにおればまた行って家の中の、何かあれば話をしたりする、それもやっぱり心の安らぎになりますでしょ。(n)」、「核家族やから朝保育所送って行くのもおばあちゃんがおったら、ちょっと送って行ってなって自分が早く行

かなあかんかったらいけるんですけどねそういうものもできないから、もう自分中心に子どもを動かしてくるっていうふうになってるんで。(q)」や、「子育ては伝承やから絶対におばあちゃんから受け継ぐとか自分の子育てが逆に今度は、娘や孫の子育てにずっと伝わっていくんやっていうのがあるから、同じように育てていくって言うのがね。(j)」などから、【祖父母の協力】によって子育てを客観的に見る視点を持てたり、伝承的な子育てに価値を見つけたりする経験の必要性が表出されている。父母共働きの家庭では、特に祖父母の存在が大きく、「私も子どもが小さい頃は両親と同居したりとか、うちも商売してましたんでね私も手伝ってておばあちゃんがずっと子守してくれたりとか、そういう中で7年か8年、一緒に暮らしてきたんです(p)」と、核家族にとって、祖父母の存在が子育ての重要なファクターになっていることが分かる。他方、祖父母は子育ての先輩であり辛口の外野でもある。親身に接してくれることもあれば、見せたくない子育ての姿も見られてしまう身近な存在として関わることになる。子どもの成長に伴って役割は変化するが、育て方ひとつひとつが妥協と確執の原因となる。【祖父母の存在、関係】のカテゴリでは、両面を“祖父母との子育てによる影響と関係をつくる方法”とした。「しつけとかでも私自身はここまでは許せるけど、おじいちゃんおばあちゃんの手前では許せないって言う時もあったんで、その時はやっぱり怒りたくないけれども、手前怒らなあかんっていうしんどさもありました。(e)」、「大家族の中におったもんで、割にみんなあの協力してもらって子育てしたんです。だから今日都合悪いからおばあちゃん見といてって言うような感じで助け合いながらしてきた子育てだったんです。(o)」、「だからまあ言う事とかお姑さんと7年8年暮らした時にやっぱりあの嫁に来てその家族の中に入って今まで私が歩んで来た道とその家族に入った生き方とは違ってやっぱり悲しい思いとか辛い思いとかそういうことは味わってる中で(p)」は、父親以外の家族の協力無しで子どもを育てることは難しいと認識している反面、自分の考えに基づいた子育てができないもどかしさを感じている。それは自分の親であっても同様である。

【21】父親の協力（他6事例）

〈具体例〉京都に住んでた時なんかはもう5時には帰って、岸和田に来たらお母さん5時に帰りなさいなんて親おらへんって。で、お祭りがまずあれでしょ、お祭りがあんな遅くまで子どもが何すんのって、信じられないことだってそんなこと言うお母さんおらへんでおまえて。(h)

【22】祖父母の協力（他7事例）

〈具体例〉なかなかやっぱり子育て文化って言うのを継承していくって言うのは難しいですね。今は特にね。昔はそれがおじいちゃんおばあちゃんと一緒やったってことですよ。近所に怖いおばあちゃんとかおっちゃんいましたよね。それと聞いてましたもんね、ちゃんと。(j)

【23】祖父母の存在、関係（他3事例）

〈具体例〉あんまり自分は何も考えていなくても、親が言ってくる。「こうするべきやのに」って。「あんたは何をしてるねん」って言うてるから、それを自分もなかなか跳ね返せない。「私あかんねん」って思う時がある。(c)

《7. 子どもへの期待・将来の姿》カテゴリの分析

子育て中期、子どもの成長とともに問題提起と解決されることによって家族の形や考え方が体験的に共有されていく。子どもへの愛着が深まり、家族の存在を再認識したり協力し合った

りする過程で、子どもへの期待や将来の姿を描いて成長を見守る関わりを【子どもへの期待(感)】の概念とした。「将来困るのはこの子やんって思うことはあるかな。(b)」等、段階では、子どもはまだ親のそばにいて、親の考え方や捉え方に直接影響を受ける時期から、「いつまでたっても子どもって言うのはそういう時代に遊んだことに対しては覚えていると思うんですね。そやから町内でもどこであつてもちゃんと声かけてもらったりとか言うような部分、それが一番大切かなと。(l)」子どもが離れてから後、自らの子育てをあらためて振り返ることができるようになる。「子どもができて初めて親になるから親も新米だからいろんな失敗して子どもによって親にしてもらったところがあるかなって思うから。見事に私は子どもは自分の思う通りにならなかったから、だから本当に。(h)」では、【子どもとの距離】の概念に通じる関係性の中で、互いが認め合うために必要な距離感について語られている。「今言ったら余計に反抗するって言うのもあるから。むこうから何か言ってくるまで、その待つって言うのはしんどいです。(e)」、「今は子どもも大きくなってきたら待つって言ってましたけど、自分の子どもを信じて、泳いでるんやから好きに、悪いことしてるかもしれへんけど、とにかく子ども信じて。(g)」、「話せる友達という訳にはいきませんが、話せるというか分かるというか感じできたとは私は思ってるんですけどね。それは今もまあ続いてるって言うか。(h)」子どもの成長を喜ぶ反面、親から離れ新しい社会とのつながりを持ち始める姿に戸惑い対応に迷う。その後、「娘がね、何かの時に作文でうちのお母さんは何事にも諦めないお母さんですって書いてくれたんです。私、言葉でお母さん絶対諦めへんからなって言わなかったんです、でも娘はまあ分かってくれてるんやなって。(e)」、「つながりの中で娘自身が会得していったというか、息子もそうですけど。そういうふうにしてそれぞれに自分の生きやすい生き方をしながら来たんやなあって。子どもは子どもで自分の道を見つけて育っていったんやなって。(h)」、「自分たちは寂しいなって言う思いも多分、それは子ども心にあるんやないか、その辺が私の後悔なんです。後悔というよりも関われなかったなあというぐらいですよ。(p)」など、子育ての節目で子どもから発信される【子どもからの反応、評価】によって関係を確かめることができる。

【24】子どもへの期待(感) (他3事例)

〈具体例〉「基本的なことは全然言わなくても自分で判断してやってるから、それはそんなに。今は一番、将来の事をどうするか、将来のために自分は今何をすべきかって言うことは話はするけど。(d)」

【25】子どもとの距離 (他3事例)

〈具体例〉子育てって思い通りにならないもんやから、思い通りになるって思う方があれやから、諦めんと思ひ通りになれへんけどまあ頑張つて育てていくってことやんね。(h)

【26】子どもからの反応、評価 (他5事例)

〈具体例〉結構ガミガミとうるさいお母さんだけど、言われていることがその時は聞いてないけどどこかに入つて、何も言われないよりは。言われることで何かのセーブに、これ以上はしたらあかんっていうセーブになったって、そのお母さんにそう言ったらいいんですね。だから言つていて良かったかなって、何年も経って大人になってからの話しなんですけど。(h)

《4. 周囲からの影響・周囲への気づき》カテゴリの分析

子どもへの気持ちの安定にとって、家族の存在とともに重要であるのが親の周囲の人々との

関係である。子育てが始まった時期、自分が思い描く理想の母親像に辿り着けないもどかしい気持ちを和らげる存在として、ママ友や地域の方との関わりがある。【気持ちの変化】概念の、「こうするべきだということがあるとするば、周りの人と一緒に育てていくもんなんやでという気持ちに、自分自身をもっていくまでが大変だったので、そういうことかなって思います。(a)」、「だからあの周りにいてはらへんなって言うのは。こう言うサロンって言うのはお母ちゃん同士でも話してできるねんね。で私たちと違うまた母親同士話ししててもね同じ子育てしてるお母ちゃん同士やったらもっと何て言うのぶっちゃけた話し本当に本音を出せるでしょう。だからお母ちゃんこう言う事もあるから来月来てねって言うたらまた来ますって帰ってね。だからその橋渡して言うのもできるかなって、思ったりするし。(k)」等の語りでは、子育てしている世代の親だけでなく、子どもが離れた世代の人にとっても影響がみられる。」また、男性からは「それ以前は私はもう子育ての部分に対しては家内に任せっきりで、なんかやだだったら知らんというような、逃げてたんです。まあそういう風なんで地域活動する中で、やっぱりこうみんなとこうワイワイ騒ぎながらやるというのが一番楽しいなと。地域の人とね交わりながら子育てをするのも楽しいぞと、言う風に感じたから活動をし始めたんです。(l)」という語りがあった。気持ちの変化によって「お母さんにしたら話しを聞いてもらえるお友達があれば、いろんな子育てで話し合える、そういうふうなことができるんでそこは大事な事かなと思うんですけどね。(n)」等の【周囲への働きかけ】が見られるようになる。【周囲からの助言】は、「自分を解放するとか、「こうせなあかん」ということはないんやでと、いろんな人に言われてから、だんだん気づいてきたんだけど。自分を追い込まない。(a)」ことに気づいた親が自分から周囲に働きかけることによって始まり、子育ての気持ちの安定にさらに影響を及ぼすようになる。「子育てサロンに来たお母さん方にいつまでも続けへんから、小学校6年生でおむつ巻いてる子いてへんからって言うてね。だからもうちょっと放っときって。自然になっていくからなって言って。(e)」、「私なんか転勤族だったからそんなのが全然なくてね、見知らぬ土地ですごい大変だったんですよ。だからそう言うものはあるから良いなと。子育てサロンも赤ちゃん訪問もね、そりゃ知らない土地で産んで地域のおじさんおばさんが来てくれたら私なんか嬉しい。だって誰も知らないもん。何かあったら声かけてやって言われたら嬉しいと思うんですよ。(h)」等、これらの語りからは、やはり地域における世代間コミュニケーション不足の深刻さが浮かび上がる。【反発、無関心】は、「あまりまわりに友達とかいなかったんで、周りに人にもあんまり聞かなかったとか、意地になってるじゃないけど、一人で私が全部するんだっていう感じがすごく強かったです。(c)」、「何か希薄になってますよね、ご近所の事とかねそう言うんはね。かわいそうではないかも分かれへんね。お節介りだけかも分かりませんもんね今のお母さんにしてみたら。(i)」「虐待やったら逆に、そう言う時やったら昔やったら手を差し伸べたらいけるけど、今は放っといてとか、うちの家族のものだけやとかそう言うのがあるからね、愛情のかけ方もやっぱり周りがサポートしていかなあかんし、逆に一日べったりしてたらその子は愛情いっぱいあるかって言うたらそうでもない時もあるのでね。(k)」、「まあおじいちゃんおばあちゃんを信じずにそういう風な情報ばかりを信じてると。心配があるのかなと。(l)」等、コミュニケーションの不足が子育て支援の利用者と支援者相互の理解の

妨げになっている、あるいは子育てに影響を及ぼすことを示唆している語りから概念化を行った。

【13】気持ちの変化（他4事例）

〈具体例〉2世帯3世代4世代家族ならねまたちょっとした助言とかいろんなものが子どもの耳にも入ってくると思うんですね。だから考えもお母さんの考えて変わってくるやろうし、孫にあたる子どもの考えもみんなの話に影響されてね変わってくるんじゃないかな。(q)

【14】周囲への働きかけ（他2事例）

〈具体例〉他の人から見たら絶対虐待やんって思って、「もうこれはあかん」って思って、保育所の先生に保育所の先生に相談、自分のしてること全部ね。そしたらすごい「気持ちよく分かるよ」ってことで、お母さんも吐き出したい時はいろんなこと相談してねって言われたんで、なんかそれですっごいなんかこう救われたって言うか、一人でこの子を育ててるんじゃないんやっていうか、みんなで育ててもらってるんやって言うことで。(c)

【15】周囲からの助言（他7事例）

〈具体例〉その保育士さんって言うんですかね保健センターの方、保健師さんに相談して、でもやっぱりそう言って、いろんなこと言ってもらったら安心するっていうのがね、で今のお母さん方もそうなんですよね結局はね。(i)

【16】反発、無関心（他8事例）

〈具体例〉私なんかよそ者やけど。だんじりってお祭りでね、青年団とかそんなんに入ってたて注意しない上の人たちもまた、そんなんも何か当たり前になってるのもちょっと怖いかなと思いますけどね。そこらへんはそんなんはやっぱりお祭りで良くないことになるんかな、うん。私なんかは違うところから来ますからそんなん見たときはびっくりしましたけどね。(i)

《5. 現状との比較・一般認識とのずれ》カテゴリの分析

サロンのスタッフが自分の子育てをしているとき、親としての義務や責任を感じて理想と現実との間で葛藤し、戸惑ったり悩んだりしながら家族や周囲の人々の協力を得て子どもへの愛着を深めている。その後、子どもが手を離れ自立して子どもを育てることや親になることを改めて振り返る時期について、インタビューの内容から“子育て内在期”としてカテゴリを関連づけた。この時期は、直接的な母性行動の時期を終えて葛藤体験がなくなるので、【親の意識、環境、経験】から本来持っていた理想の母性像・母性意識の意味を再び持ち始めるようになる。いわゆる喉元過ぎれば熱さを忘れるようになるため、「怒ってる人おるよね。なんかもう今にも手を出しそうなお母さん、若い人だね。みかける。あんなことで怒らんでもいいのに、って思う。(a)」の語りにあるように、子育ての経験をしているが、現在子育てしている家族の育児のつらさや大変さ、孤独感などに共感できにくくなると思われる語りが多くなる。また、「遅くまで遊んでいたたりしても、親なんも言わんのって、つい思ってしまう。母子家庭の人もいるからそうになってしまうんかなって思うけどね。母子でもちゃんと育ててる人もいるけどね。身近にそんな人知ってるから。それはあかんやろって言うのもいる。(c)」、「若いお母さんとか、めっちゃおしゃれやなって、ちっちゃい子どもがいてるのに。反対に私はすごいなって思ってしまう。そんな余裕なかったなって思いながら。(c)」等、多様な子育て方法や働き方によって親の行動や考え方に相違があるため、受入れがたい面が多々あることも確かである。「そこまで突っ込んで話してもなかなか平行線っていうかね、通じ合えないっていうか、子どもがかわいそうやなって思うんですけど。信頼関係があったら言えるけど、信頼関係が無かったら言われへんよな。わざわざ嫌われるようなこと言いたくない(g)」、「だから私たちがやってきたこと

そそのままた言ったら、それもまた、ねえ、うまくいかないと思います。(h)」等の語りからは、互いに踏み込んで関わり融和しようとする段階から、違和感を感じて遮断しようとする段階に入っている一面を示している。この地域独特の価値観として、「特にあの、祭りの前後ね。祭りの前後はよく分かりますね。で月齢がちっちゃければちっちゃいほどね。お祭りになると例えばお家で食事しないでおばあちゃんとこに泊まっておばあちゃんとこから保育所に来たりとか、それでリズムがごつつい崩れるねんね。(k)」、「もうその岸和田の青年団ちゅうたら地域活動の中に入っていってるんですよ。それがまあ強みかなと。まあ例えば掃除とか、いろいろあの夜警とか、いろいろそういうふうなね、自分らでやっていってるから。だから団結心はものすごくある。だから祭りが必ずしも非行に走るってとか違って、地域活動の中でもその中に溶け込んでいろんな部分で手助けしたり協力してもらって。これはなかなか良い組織やないかなと思いますね。(l)」等、賛否はあるが祭礼を中心にした地域住民の古くからのつながりを挙げる人が多い。そのような地域でも、【家族の孤立による閉塞感】は深刻である。「ちょっと下の方行ったらなり誰が住んでるか分からない。だからお母さんももう孤独感ですよ、子どもと二人きりって感じになっちゃうから。(h)」、「入れてる人は入れてるんですけどね、入れてない人たちが大半居るところでは何かまたね、そのグループの中に入りきれてない、もともとの地の人はそこでうまくやっていたけど、新興住宅で引っ越してきてそこに生活してる子どもさんたちは入れない。(i)」、「昔はお母さんやったんよね、その逃げ道がね。もう家族同然でね、隣近所付き合ってたからね、今はもう疎遠になって来てね、隣にも駆け込まれないし。(q)」は地域により世代により、または古くからのコミュニティによって住む人々が家族との付き合いの中でさまざまな“つきあいづらさ”を実感している。「逃げ道っていう表現は良くないんやけど、お友達とか心を開いて話してできる、一人でも良いからお友達がね、それが親であるのかお友達であるのかそれは誰でも良いんやけど、心を許して自分の愚痴でも悩みでも聞いてもらえる親しい人、それを一人持つって言うのは大事な事って言うんかな。孤独にさせない、子どもも大人も。(p)」の語りから、【(母)親の自覚の確立】は、親は子どもを育てることだけでなく、「やっぱり一人って言うところではあるんかなって。あの、なんぼ仲良くってその遊びの事とかいろんなことはあっても家の事とか子どものこととかを、その悩みを共有する人って言うのがいないのかなっていうね。それかまあその一人ぼっちのお母さんになってるんかな。(j)」その行為を通して、周囲の人々との協働や協力で成長できることが語られている。【振り返り、反省】では、現状との比較をしながら今の子育てと共通するもの、不足していたものについての語りを概念化した。「今のお母さんはお母さんなりにね。自分らもそうやったと思います。自分らも若い時は上から見たら何やってるんやって言うような、あれやったんやと思うけども、また私らから見たらそのお母さんらもくり返しに、順繰りにそんな感じでね、うん。(e)」、「本質的なものはやっぱり自分が子育てしたときと、大きくは変わってないんじゃないかなという気がします。(h)」等の語りからは、子育て支援に携わることで、今どきの子育てや家族の考え方に触れる機会を持つことができて共感している。あるいは、「あのこんな時こういうのがあったというふうなことで、今になって言われたらちょっとこう、ああしもたっている反省の分はあるんやけども。こっちとしたら悪い事で、ね、矛盾してる事で怒ってる

訳やないから、まあ例えば遅なったり何かこう変な事したりというふうな時怒ってるだけで、手出したりとか。(1)」、「自分がね忙しかったからそんなに一から十まで子どもべったりの関わりをまあしてこなくて良かった面と悪かった面とありますんで。もう少し関わってあげたら良かったなあって、自分が忙しいあまりに関わってやれなかったって部分もあったかなって。(p)」等、自分の子育てを冷静に振り返るきっかけにしていることが示されている。このカテゴリからは、子育て内在期の“親の意識、環境、経験”概念におけるこのような心理傾向が母性意識・母性像の観点に再び影響を与え、親としての義務や責任にフィードバックさせていることが分かる。子育ての振り返りや反省は、あらためて明確な指針や母性の意識化を形成するためのファクターとなる反面、子育て支援に参加することで子育て中の親への関わりの中で融和され、固定観念になることは避けられる。子育て支援は、老若男女を問わずどの立場の人であって子どもを育てるという行為の下に共有、共感できる場であることが示された。

【17】親の意識、環境、経験（他 12 事例）

〈具体例〉ゆとりが無いお母さんも多いし、やっぱりこの世の中の流れで時間的にも金銭的なことでもやっぱり余裕がないお母さんたちが多いので、(中略) ちょっとこの世の中の流れで余裕が持たれへんお母さんは気の毒なあと。時代の流れかも知れへんけど、もうちょっとなんかゆったり子育てできたら良いのになと思います。(g)

【18】親の孤立による閉塞感（他 4 事例）

〈具体例〉この前もちよっとね、おっぱいがねちよっとうまくよう飲まない、よう吸わない、それでね吸うてるんやけどもお腹大きくなりなで疲れて寝てしまってね、もうそしたらボロボロ泣きながら話してくれるんですよ。(e)

【19】(母) 親の自覚の確立（他 6 事例）

〈具体例〉夜って子どもが小さい時ってそんなに動けなかったけど、今はけっこう平気で、かごの屋に 10 時ぐらいに食べに行ったことがあったらバタバタしてるんですよ子どもが。ウィークデーに。こんな時間に子どもがいて良いのと。結局親の都合の時間で、あれは私らの頃には考えられなかった。(h)

【20】振り返り、反省（他 5 事例）

〈具体例〉もういっぺん子育てをし直すならばそういう叱り方からして今の若い人を見習わなあかんと思うてね。子どもの気持ちというものを踏みにじらないようにせなあかんと思う。(q)

理論的飽和の判断

今回の分析方法である M-GTA では、これ以上概念が生成されない理論的飽和に達するまでデータの収集と分析を行う必要があるが、各概念の分析ワークシートを作成し適正な概念数を生成したことや、研究に参加した社会福祉協議会職員と一緒に相関図を作成して評価を得たことにより本研究の分析を終了する判断にした。

考察

本研究は、子育てサロンのスタッフが抱える心理的傾向に着目し、スタッフが子育ての経験者、善き理解者として利用者の子育てに共感し、対応していくための指針にすることを目的とした。M-GTA による分析の結果、子育てのプロセスは (1) 子育て初期における母性意識と母性行動による葛藤の時期、(2) 子どもへの愛着形成や家族と周囲の助けによって子育てが安定する時期、(3) 子どもが成長して節目を迎え自らの子育てを振り返る時期の 3 つに分けること

ができた。初めて子どもを育てる親は、育児に関するストレスによって抱いていた理想の母親の姿や母親として取るべき義務や責任に自信が持てなくなったり行動できない自分と葛藤したりする混乱を体験し、子どもと関わる大変な時期を迎える。この時期は、子育ての明確な指針や親の役割を確認する一方で、理想と現実との間で揺れる初期の気持ち、あるいは成長する子どもとの距離を模索しようとする姿が読み取れる。子育て中期では、子どもへの愛着形成と深まりや子どもからの評価、家族の支えや周囲との関わりによって徐々に子育てに対する視野が広がり自信を獲得し、子どもの成長に現実的な期待が持てるようになっていく。子どもが成長して自分の元から離れるなど子育ての節目を経験した後、自己にとって子育ての意味を振り返るようになる。そこでは子育てを達成した心理的余裕や肯定感をもとに母親としての意識や行動の再確認がなされ、母性傾向を基本とした母親としての実感を深めることが可能になる。この時期は、現状の子育てとの比較の中で自分の子育てを肯定しようとする作用が働くために、未体験な育児方法や若い親の行動に危うさを感じたり批判したりする。しかし同時に、自らの子育てを振り返ることによって共感し、新しい家族のあり方や子育てを理解しようとする。大日向²²⁾は、育児行動および育児環境における世代差を調査した結びに、世代差を検討する本来の目的として、表面的な変化を問題とすることではなく、変化の根底に存在する諸要因に目を向けることにあると述べている。ここでは、内在化された母親像が固定観念として留まることなく省察され、世代を超えて“子育ての知”を伝えていく機会が子育て支援の取り組みの中で形づくられていると言える。

本研究の応用可能性について述べる。木下²³⁾は、M-GTAを用いた研究はその結果が現場で活用され、実践と現場との間での相互的な交流が生まれることが重要であると述べている。本研究を始めるにあたり、研究結果を子育てサロンのスタッフに開示し実践に役立てることを目的のひとつにしていた。本研究で明らかになったプロセスは関連図によって容易に理解することができる。またスタッフの子育て経験の有無、あるいは子育て支援の理解や適正に差異がある場合、それが原因で利用者への対応に差が生じないようにスタッフの性質を明確にして対応方法を改善するうえで有効であると考ええる。ただし、この研究によって示された子育てのプロセスは、子育て経験や各グループ世代の特徴などによって語りが異なることに留意しておく必要がある。例えば、Dグループで語られていた多世代家族の事例は核家族が主流の現在では稀少なケースであり、今後このような傾向が強まっていくものと考えられる。したがって同じ設問でインタビュー調査を行っても子育て内在期における認識のずれは常に変化することが予想される。また、今回の調査は追跡調査ではなく各グループ1回のみのインタビューであり、各世代がひとつのグループの語りによってのみ反映されているため、世代による傾向が偏ったものであった可能性を否定できない。例えば各世代に焦点をあてて追跡調査を実施することによって、今回の研究で分類した子育て時期における概念と研究で導いた結果が合致するのか検証することができるが、現場に対する還元作業に時間がかかるため現実的ではない。つまり調査結果は、規模的にも期間的にも限定されたものであることを認識しておく必要がある。これらはいずれも今後の研究課題である。

引用・参考文献

- 1) 野呂アイ・津田千鶴 (A. Noro, C. Tsuda 2010) 地域における子育て支援と保育環境——一時保育をめぐる乳幼児と保育士の発達保障を中心に—— *Child rearing support and the environment of child care in the Sendai city: Examination on guaranty of the rights of early children and nursery teachers in temporary child care*
保育学研究第48巻第2号139-148 *RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION in JAPAN Vol.48 No.2 2010*
- 2) 柏木恵子・若松素子 (K. Kashiwagi, M. Wakamatsu 1994) 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究第5巻第1号72-83 *THE JAPAN SOCIETY OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY Vol.5 No.1*
- 3) 山縣文治 (H. Yamagata 2001) 子ども家庭と地域福祉 *Children-Family and Community Welfare*
地域福祉研究第29号25-31 *STUDIES OF COMMUNITY WELFARE No.29, 2001*
- 4) 大豆生田啓友 (H. Oomameuda 2013) 保育の場における子育て支援の課題 保育学研究第51巻第1号134-142 *RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION in JAPAN Vol.51 No.1 2013*
- 5) 柏木恵子 (K. Kashiwagi 2009) 家族の心はいま——研究と臨床の対話から—— 170 東京大学出版会
- 6) 篠原郁子 (I. Shinohara 2006) 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発——母子相互作用との関連を含めて—— *The measurement of maternal mind-mindedness: Its relation to mother-infant interaction in natural settings*
心理学研究第77巻第3号244-252 *The Japanese Journal of Psychology Vol.77. No.3*
- 7) 若本純子 (J. Wakamoto 2016) 誰がどのように子育て支援を利用してきたのか——我が国の子育て支援における課題—— *Who and How the Parenting Support has Been Used?: The Issues of the Parenting Support in Japan*
佐賀大学教育学部研究論文集 Vol.1 no.1 1-9
- 8) 田中文昭・戸田有一・横川和章 (F. Tanaka, Y. Toda, K. Yokogawa 2013) 幼稚園での異年齢交流型子育て支援プログラムにおける未就園児親子と在園児との関わり——行動観察記録の M-GTA による質的分析—— *Understanding Communication Between Parents, Pre-Kindergarten Children and 5 Year-Olds During Peer Play Activity in Kindergarten: A Qualitative Analysis of Speech and Behavior of Using M-GTA*
保育学研究第51巻第2号109-121 *RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION in JAPAN Vol.51 No.2 2013*
- 9) 實川慎子・砂上史子 (N. Jitsukawa, F. Sunagami 2013) 母親自身の語りにみる「ママ友」関係の特徴——相手との親しさの違いに注目して—— *Characteristics of “mama-toms” in mother’s narratives: Focusing on differences between friendship with the other of mothers*
保育学研究第51巻第1号94-104 *RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION in JAPAN Vol.51 No.1 2013*
- 10) 工藤遥 (H. Kudou 2013) 都市の育児援助システムにおける「子育てサロン」の機能 *The Function of Collective Child-Rearing Opportunity in Urban Supporting System*
北海道大学大学院文学研究科研究論集第13巻453-474 *Hokkaido University Collection of Academic Papers: Research Journal of Graduate Students of Letters Vol.13*
- 11) 大阪府 (2005) こども・未来プラン 第1章子ども、青少年を取り巻く状況3子どもと子育てをめぐる状況 (5) 子育てに関する保護者の意識 21
- 12) 杉村千聖・鈴木真由子 (C. Sugimura, M. Suzuki 2016) 子育て中の母親の情報利用実態および子どもイメージ *A Factual Investigation of Mothers’ Information Use and Images of Children*
大阪教育大学紀要第Ⅱ部門社会科学・生活科学第65巻1号1-9 *Memoirs of Osaka Kyoiku University, Ser. 2 Social Science and Home Economic*

- 13) 柏女霊峰・橋本真紀 (R. Kashiwame, M. Hashimoto 2008) 保育者の保護者支援 保育相談支援の原理と技術 266-267 フレーベル館
- 14) 香崎智郁代 (C. Kouzaki 2016) 「子育て支援員」に求められる力量に関する一考察 A study in the competence required of child care and parental support workers
九州ルーテル学院大学紀要 (vicio: research reports) 11-23
- 15) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局「子育て支援員研修実施要項」
- 16) 藤林清仁 (K. Fujibayashi 2015) 子育て支援員の研修から考える保育の専門性
名古屋経営短期大学 (こども学研究論集第7号) 53-63
- 17) 梅野和人 (K. Umeno 2015) 子育てサロンにおけるスタッフの心的傾向と考察—大阪府 K 市の子育てサロンの取り組みとスタッフの意識調査から— Discussion and Psychological trend of child-rearing salon staff—Efforts and awareness survey of child care salon staff of Osaka K City —
四天王寺大学紀要第 59 号 599-608 *Journal of Shitennoji University Vol. 59*
- 18) 江上園子 (S. Egami 2005, 2007) 心理測定尺度集Ⅵ現実社会とかかわる (集団・組織・適応) サイエンス社 214
- 19) 江上園子 (S. Egami 2008) 「母性愛」信奉傾向と母親が抱く養育信念との関連 The Relation between Mothers' Adherence to "Maternal Love" and Their Beliefs of Parenting
北海道大学紀要 (教育科学編) 第 58 号 第 2 号 197-203 *Journal of Hokkaido University of Education (Education) Vol. 58, No. 2*
- 20) 木下康仁 (Y. Kimura 2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い— 弘文堂
- 21) 木下康仁 (Y. Kimura 2012) 質的研究の基本的理解と研究計画の立て方
介護福祉学第 19 巻第 1 号 108-114 *The Japanese Association Research on Care and Welfare Vol. 19 No. 1*
- 22) 大日向雅美 (M. Oohinata 2016) [新装版] 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証 134 日本評論社
- 23) 木下康仁・萱間真美 (Y. Kinoshita, M. Kayama 2005) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) について聴く 何を志向した方法なのか、具体的な手順はどのようなものか Interview the exponent about Modified Grounded Theory Approach (M-GTA): Its aim and practical methodology, 3-21 看護学研究 38 *Japanese Journal of Nursing Research*, 38

追記

本研究結果は、平成 25 年度岸和田市子育て応援団ネットワーク連絡会 (2013 年 6 月 20 日岸和田市社会福祉協議会主催、岸和田市健康推進課他協力) において「子育てサロンスタッフの心的傾向調査から～地域の人々が“きしわだっ子”の育ちを支えるために～」の題目で講演、発表した。また第 67 回日本保育学会 (2014 年 5 月 17 日) において口頭発表した。

謝辞

本調査研究の実施ならびに子育て応援団ネットワーク連絡会の講演において、岸和田市社会福祉協議会職員の沖藤政紀氏、三林達哉氏、赤石由依氏、上松祐太氏をはじめ、多数の方々へ一方ならぬご支援ご協力を頂きました。紙上にて感謝の意を表します。有り難うございました。

Psychological Tendency and Consideration of Staff in Child-rearing Salon

— From the approach and qualitative investigation of
Kishiwada City, Osaka Prefecture —

Kazuhito UMENO

The purpose of investigation is to conduct qualitative research on staff of child care salon which is one of child rearing support projects, to clarify their psychological tendencies and to consider support methods. The target is total of 17 people who are continuously engaged in support in each region of Kishiwada City, Osaka. A detailed semi-structured interview was conducted, and interview data totaling 255 minutes was obtained. As a result of analyzing using M-GTA as a reference, the 26 concepts and 7 categories were generated and charted the relevance. The psychological tendency of child rearing salon staff was shown to be composed by the following process. Supporters (staff), based on their own child-rearing experiences and experiences involved with children, Supporters (staff) grow "their affection for children", are based on "duty / responsibility as parents (mothers)" and "stability of parents / parenting feelings", At the same time, they get "family presence / cooperation", and "awareness to the surroundings", and they are engaged with users concerned from knowledge of experiences. On the other hand, it was shown that "feeling confused about support method and contact with users by" comparison with current situation and deviation of recognition ".